ます。この時代に、当時次第に増加しつつあった非キリスト教的環境での伝道活動により、フランスを少しづつプロテスタント化することが、企てられました。プロテスタンティスムには、現代文明とフランスの政教分離により調和的な、キリスト教の一形態として現れ、カトリックに代わりつつ、次第に勢力を伸ばす可能性がありました。しかし、実際には、非キリスト教化の影響は、フランスの人口全体に及び、そこには、改革派を背景にもつ人々も含まれていたのです。先ほど、プロテスタントの起源を持つ人口の拡散と、それによる否定的影響について述べた通りです。プロテスタンティスムは、カトリックに対し前進しなかったのであり、フランスのプロテスタント化の賭（それは、ほとんど道理にかなったものではなかったのですが）は、はずれたのでした。

しかし、状況を規定する枠組は、二つの世界大戦とともに急激に変化します。これらの戦争は、同じ試練が全国民により経験されたため、フランス社会の統一を強化することになります。宗教面においても、キリスト教徒間の教派的分裂は不快感を与えるものであり、つまずきでさえある、という感情を引き起こしました。1950–1960年の教会合同運動の発展は、非常に一般的となったこの感情を、公に表したものです。フランス・プロテスタンティスムは、今日においてもなお、1939–1945年の戦争の結末である、この状況の中にあるのです。これには、現在と未来にとって、有利な点と不都合な点があります。一方においては、プロテスタンティスムは、フランスのカトリック教会によりパートナーとして認められたのであって、敵や競争者としてではありません。プロテスタンティスムは、過去に経験のない、肯定的な地位を享受しています。

それが具体的に意味するところを知るために、一つの例を挙げましょう。過去において、プロテスタントがカトリックと結婚する時、カトリック教会は、結婚が自分たちの儀式により執り行われることを要求しました。実際には、儀式は教会の身廊で行われず、なにか恥ずべき事であるかのように、聖具室でなされ、プロテスタントの家族には屈辱として受け取られました。今日、結婚は身廊の中で行われ、しばしばプロテスタントの牧師がつきそうことさえあります。

しかし、この両教会の合意の状況は、不都合をももたらしています。かつての対立は、両教会に、自分たちを他とはっきりと区別させ、自分たちのメッセージの特性を明確化させることを、余儀なくさせていました。今日、信条による相違は、信徒と世間一般の精神の中では、消えつつありますが、この現象は、少数の側、すなわち社会学的により弱い側にとって、危険です。アイデンティティが相対的に消失し、致命的となる恐れがあるのです。

実際、次のような例があります。かつて（第2次大戦まで）両信徒間の結婚は稀であり、それが為された場合には、新生児は、どちらかの宗教で、一般的にはカトリックの側で、洗礼や教育を受けました。それゆえ、プロテスタントは、未来の子供と共に自分の宗教に留まるために、信徒同士で結婚することを好んだのです。カトリック教会も、両派の混合の結婚には、あまり好意的ではありませんでした。今日では反対に、混合の結婚は多く、プロテスタントにとっても多数派になりつつあります。プロテスタントの二人に一人が、一度はカトリックと結婚しているのです。

それ故、悲観的な人たちは、社会学の観点から、この種の結婚により、プロテスタントは多数派であるカトリックに吸収され、消失すると考えるかもしれません。しかし、実際には、次の二つの理由により、否定されます。第一に、今日、もはや混合の結婚は、カトリックの信徒がプロテスタントの伴侶を自分の宗派に引き入れることを、意味しなくなっています。反対に、今日の混合結婚においては、それぞれの宗教の実践がそのまま維持されることは稀でなく、二人でプロテスタント教会を選ぶことさえ、稀ではありません。混合結婚を自発的に選んだ者には、プロテスタント教会は、霊性の現代的必要に対し、より開かれ、より適合したキリスト教であると写っています。

第2に、混合結婚から生まれた子どもたちは、もはや組織的に、カトリックに引き入れられてはいません。フランスのプロテスタントは、次第に、混合のカップルから生まれた子供たちにより、構成されつつあります。それは、全く新しい事態です。というのは、プロテスタントの圧倒的多数は、